

## 『 サブちゃんを呼ぶ 』



1995年3月12日から2011年6月8日まで小六家にいた白い柴犬の小六三郎については、妻の倍賞千恵子が同じリレーエッセイで詳しく書いていますので、合わせてお読みいただければ嬉しいです。

僕は三郎のことを、いろんな呼び方で呼んでいました。サブ！サブちゃん、ボク、イイコ。その時の状況、いたずらをしたり粗相をした時はサブ！！だったり、あまりに寝顔が可愛くて、ボク、イイコ、ねー、となったりします。とにかく、どのくらいうちの子は可愛いかを表すためにいろんな呼び方になってしまうのです。サブ本犬も慣れてどんな呼び方をしてもちゃんと判ります。とにかくばかばかしいほど、どうしようもなく、愛しくて可愛い存在であるということを手のかしたくていろいろ呼ぶわけでありました。

ご多分にもれずサブちゃんもいろいろ病気になったり具合が悪くなったりしま

した。生まれつき睾丸のひとつが体内に残っていたので、病院のオカモト先生は、いずれ大きくなったらそれが悪さをするかもしれないとおっしゃっていました。やはり10歳のころそれがやってきました。お腹を5センチくらい切って悪さをして大きくなったタマタマを取り出しました。手術は大成功で、回復するまで、病院で預かりますとのことで家に戻ってしばらくすると、オカモト先生から電話がありました。「麻酔が覚めたのですが、サブちゃんがどうしても泣き止まない、このままでは縫合したところが開いてしまうかもしれないので、引き取りに来て下さい」僕はあわてて病院へ戻りました。そして、サブちゃん！ボク、イイコ、と叫びながら、病室のドアを開けますと、彼はそこから飛び出して僕の手の中へ飛び込んできました。抱っこしたその時から彼はクーンクーンと二回くらい文句を言って静かになりました。それまでずっと泣き続けていたそうです。オカモト先生曰く「可愛がられている子は大変なんですよ」

自慢話なのです。彼は僕をたよっているのです。頼られていることは、愛の証！  
もうここまできるとどうしようもありません。

最後の半年くらいは動けなくなり半分寝たきりのような状態でしたが、何故かその時のことはそんなに鮮明には覚えていません。思い出すことは、楽しく食事をしたり、散歩したり、お昼寝したり、そんな些細なことばかりです。亡くなっ

た時も、腕の中で、サブちゃん、イイコ、ボク、イイコ、ねー。という僕の声  
を聴きながら天国へ旅立ちました。

サブちゃんのいた16年あまりの年月は私たちにたくさんの思い出を残してくれ  
ました。そして今でも、23歳になった彼は私たちのそばにいます。そして今も、  
時々、サブ！！、サブちゃん、ボク、イイコ、ねー。と呼んでいます。

作曲家／編曲家 小六禮次郎

小  
六  
禮  
次  
郎

